

演劇ユニットハナウタ 第三回公演 上演作品

「FLASHBACK : repeat」

作 夏井菜月

^登場人物^

山崎 ふみ

大学二回生。文芸部。(20)

遠藤 かなえ

大学三回生。文芸部。(21)

郷田 藤乃

作家。(19)

場面1 過去

SE 海の波の音 蝉の声

照明 FI

かなえ・藤乃がゆつくりと現れる。藤乃は松葉杖をつき、かなえはどこか苦しそうな表情。

藤乃 海の声がね、聞こえるの。ずっと。

かなえ ……

藤乃 今にも海に飛び込んで、死んでしまいたいような顔

かなえ そうしてって言うならそうするよ

藤乃 ……もうすぐ時間でしょ？ ほら。行って

かなえ 私も、海、聞こえてる。

藤乃 ……

かなえ 聞こえてる内に、必ず、償いに来るから。

藤乃 ……待ってる。

場面2 部室

舞台上に設置してあるソファにて寝ているかなえ。そこへ寄り、話しかける山崎。

山崎 遠藤せんばーい

かなえ ……

山崎 おはようございまーす！ いや、おそようございます？ あ、おはようございます！

かなえ 今何時？

山崎 もう四時過ぎですよ。

かなえ うわ……寝すぎた。単位……

山崎 落としちゃいましたか。何してるんですかー。流石に間に……合わないか。ご愁傷様です

かなえ ……おやすみ。

山崎 あっ、もう先輩寝ちゃうんですかあ？ お得意の現実逃避ですか？ 先輩、単位落とした

現実も寝ても変わりませんか？

かなえ 厳しいことばっか言うなあ

山崎 先輩のためを思ってます！

かなえ 私には私の人生つてものがあるんだから、好きにさせてよ

山崎 先輩の場合は好きにし過ぎですから！

かなえ おかん

山崎 何とでも

SE 着信音

かなえの携帯が鳴る。慌てて飛び起きるかなえ。

かなえ もしもしっ あ、うん。今から。分かった

山崎 え、先輩？ どっか行くんですか？

かなえ ごめん、また今度

山崎 今度って、

かなえ、藤乃の部屋へ。

藤乃 かなえ、コンビニ行ってきてくれる？

かなえ ……え、呼んだ理由って、それだけ？

藤乃 お腹空いたの。急いで？

かなえ ……分かった。……今日、海見えるね

藤乃 この部屋、海が見えるから選んだの

かなえ そうなんだ

藤乃 綺麗でしょ

かなえ うん

SE 海の声

かなえ、部屋へ移動。

山崎 「フラッシュバックによる日常生活への影響」。へえー難しそう。あ、これ先輩が書いたんだ。一応こういうの書くんだなあ……

かなえ ……何いたの。

山崎 いたのって何ですか。失礼しちゃいますね

かなえ それ、私のレポート？ 何勝手に読んでんの

山崎 ああ、すいません。何か置いてあったんで……

かなえ 別にいいけど。

山崎 先輩。この部屋って、海、見えるんですね。私初めて知りました

かなえ まあ。海辺の大学だし、そりゃ見えるんじゃないの

山崎 何か、いいですね。すぐ行けるとところに海があるって

かなえ 潮臭いからやだな

山崎 それがまたいいんじゃないですか！ 先輩は人生の醍醐味ってものを分かってませんね

かなえ ……

山崎 ……黙らないでくださいよー！ 気持ち悪い

かなえ ごめん

山崎 ……顔色、良くないですけど。寝てないんですか？

かなえ うん

山崎 不健康

かなえ 分かっては……いるんですけど。

山崎 あ、それ。コーヒーが原因なんじゃないですか？ 寝れないの

かなえ そうかもね

山崎 よし、しばらく牛乳にしときましよう。ね？

かなえ お腹壊しそうだなあ

山崎 寝れないよりマシですって

かなえ 分かった分かった。買ってくる

かなえ、藤乃の部屋に向かう。

かなえ どう？ 調子

藤乃 ごめん紅茶、入れてくれる？

かなえ うん

藤乃 もうすぐ締め切りなの、砂糖はいらないから

かなえ 分かった

藤乃 ありがとう

かなえ ……いいな。作家って

藤乃 え？

かなえ いや。何か、魂込めて書いてるって感じがして。完成するの、楽しみにしてるよ

藤乃 ……かなえも、書けばいいんじゃない？

かなえ 私は、いいよ

藤乃 作家、目指してたんでしょ？ 諦めていいの？

かなえ 昔の話だよ

藤乃 何で今は、書かないの

かなえ 別に理由なんか、無いけど。

藤乃 ああそう。

かなえ うん

藤乃 ……本当は、こんなところにいるんで、書きたいんでしょ

かなえ ……

藤乃 逃げたいなら、逃げればいいのに

かなえ それは……違うっていうか。

藤乃 何が違うの。

かなえ 逃げたいなんか、思っけてないよ。私は藤乃のために、今こうしてここにいるんだから

藤乃 あなたの言う私のためって、自分が救われたいから出る言葉よね

かなえ ……何でそういうこと言うの？

藤乃 私がいると、かなえは自分らしく生きてくれないのね

かなえ ……よく分かんないけど、どうしたの

藤乃 何でもない。もう放つといて。言ったでしょ、締め切り前って

かなえ ……ごめん。

かなえ、部室へ移動。

山崎 先輩。せんぱーい。
かなえ ……

山崎 また冴えない顔してどうしたんですかあ。振られたんですか？ それとも何ですか、あつ、単位落としました？

かなえ 痛いところ突かないでよ

山崎 えへへ。事実事実う

かなえ ……

山崎 あつ、今「心底むかついた」って顔しましたね？ 傷つくじゃないですかあ

かなえ ……はあ

山崎 ……どうしたんですか先輩。

かなえ 何でもない。

山崎 もうー、何かあったなら、私聞きますよ？

かなえ 何でもない！

山崎 うわつめんどくさ！ そういうの、らしくないですよ

かなえ 私らしいって何なの……

山崎 先輩のアイデンティティを私に聞かないください

かなえ 無責任

山崎 後輩とはそういうものなのです

かなえ ……あのさ

山崎 何ですか？ 何でも言っちゃってください！

かなえ 山崎、この本。好きだよ

山崎 好きっていうか。作家郷田藤乃のファンなので。

かなえ もし、会えるって言ったら？

山崎 え？

かなえ 郷田藤乃に会える

山崎 メディアに一切顔出しNGの藤乃さんですよ？ そんなわけ……えっ、それって、握手

会とかではなくて、その、え？ どういうことですか

かなえ 一カ月、藤乃のところで住み込みのバイト。どう？ ファンとしては、魅力的じゃない？

山崎 ……………はい。

かなえ じゃあ決まりね。明日、ここに行つて。

山崎 わ、分かりました……。夢ですか？

かなえ 夢じゃないよ

山崎 私、本当に藤乃さんの本が好きで、その！ 何ていうか、例えるなら白いワンピースみたいな！ だから、ありがとうございます！ 先輩見直しました！！

かなえ 最後の余計。じゃあ帰るね。明日、よろしく

山崎 はーい。

かなえ、一度はける。

場面3 藤乃の部屋

山崎、藤乃の部屋へ移動。

SE ノックの音

藤乃 はい

山崎 あっ、初めまして！ 遠藤先輩からの紹介で来ました、山崎ふみって言います

藤乃 ……はあ。

山崎 ……も、もしかして何も聞いてないですか？

藤乃 ああいや。少しなら聞いているから。大丈夫。上がって

山崎 なら良かったです。まさかあの先輩が、後輩を、無断で、人の家に送り込むなんてこと、するはずないですからねっ

藤乃 ……

山崎 です…よね？

藤乃 ……あ、荷物。その辺、置いてもらって。

山崎 あ、はい

藤乃 (椅子に戻ろうとする)

山崎 大丈夫ですか？ 手伝いますよ

藤乃 ごめんなさい、ありがとう

山崎 いえ、全然。

藤乃 ……

山崎 あ、足。どうかしたんですか？

藤乃 え？ ああ…ちょっと、事故で。

山崎 そうなんですか。何か、大変ですね

藤乃 まあ…そうね。

SE 着信音

山崎 あっ、先輩！ ごめんなさいちょっと、電話してきますね
かなえ もしもし

山崎 先輩！ 話、ちゃんとしたんですか？ 藤乃さん、何かびっくりしてますけど。空気悪いんですけど。聞いてた話と全然違うんですけど！ 本当に私来て大丈夫だったんですか？

かなえ ごめんごめん。大丈夫だよそれに、山崎ならどうにかなるよってか、して？

山崎 どうにかなるって、してって何ですか。無責任なのは先輩じゃないですか！ ほんっと、そういうのが魔法の言葉と思ったら大間違いですからね！ もう。とりあえず私、何したらいいんですか？

かなえ 藤乃に聞けばいいんじゃないの？

山崎 ……あの、適当過ぎませんか？ 人のこと送り込んでおいて！ 説明責任果たしてください！ 訴えますよ！？

かなえ あー、落ち着いたらあとで行くからさ

山崎 絶対ですよ！ 待ってますからねっ！

藤乃 電話……かなえ？

山崎 あっ、はい。

藤乃 そうですか

山崎 後で来るらしいです。一回怒らなきゃ

藤乃 ……ふふ

山崎 藤乃さん、何であんな先輩と……？

藤乃 幼馴染なの

山崎 へえー

藤乃 あんな先輩呼ばわりは可哀想ね

山崎 だって先輩……いや、これ以上先輩の話はよしませう。ちょっとむかついてきました

藤乃 ふふ

山崎 そういえば藤乃さんって、あの有名な作家の郷田仁？ の娘さんなんですよね？

藤乃 どこからそれを？

山崎 先輩が言ってたんです。藤乃さんが、お父さんの血を継いで作家業してるって

藤乃 ……

山崎 いやあ、すごいですよね、親子揃って作家なんて。何か尊敬しちゃいます

藤乃 ……凄くは、ないですよ。

山崎 どうしてですか？

藤乃 私は、別に好きで書いてませんし。それに話、面白くないですから。何も凄くありません。

山崎 ……私、大学入って、小説家になりたくて、文芸部に入ったんですけどね、もう全然書けなくて。きつと才能が無いんだなーって諦めて、今は読むことだけに専念してて。私からすれば、面白いか面白くないかは正直どうでもよくて、お話が書けることが！ もう十分すごいことなんです！

藤乃 ……ありがとう。

山崎 ほら、藤乃さんが書いたこの本。私凄く好きなんですよ。特に、最後のこの部分。「希望」がそこにはあった。動かない右足、倒れた父親。遠くでは幾重も波の行き交う音が聞こえる。父を殺した彼女を、ただ、許そうと思った。きつとこれから先、彼女達は、いつ忘れられるかもわからない記憶と一緒に、生きていく。」……凄く、深いですよね。私には絶対思いつかない

藤乃 ……そうかしら

山崎 そうです！

藤乃 誰でも、経験したことなら、お話は書けると思うけど。

山崎 いや。それでも、読み物として昇華させてしまえることが凄いですよ！

藤乃 前向きね

山崎 取り柄なので！

SE インターホンの音

山崎 あっ、先輩かも！ ちょっと私出てきます

山崎 先輩！ はあ……話はあとです。上がらないんですか？
かなえ 今日は、いい。

山崎 何遠慮してるんですか？

かなえ 藤乃、元気してる？

山崎 そんなの先輩が確認すればいいじゃないですか。

かなえ いや、それは……その

山崎 その、何ですか？ だから、上がって見に行けばいいでしょ！

かなえ いいって

山崎 鬱陶しいですね……。ほら、行きましょ

かなえ ……昨日ぶり

藤乃 逃げたんじゃなかったの？

かなえ ……いや……

藤乃 海の声、聞こえなくなったんだって思ってたのに。

かなえ それだけは絶対に無いよ。

藤乃 ……何のために来たのか知らないけど。帰って。

山崎 えっと……

かなえ ……ごめん。帰る。

去ろうとするかなえ。慌てて追う山崎。

山崎 ちょっと先輩！ 何かあったんですか？

かなえ 何もないよ。気にしないでいいから。早く藤乃のところ戻って。

山崎 ……………。

場面4 過去

SE 蝉の声

藤乃の髪を梳くかなえ。

藤乃 慣れた？

かなえ うん

藤乃 良かった

かなえ もう一週間経つから。

藤乃 早いね

かなえ うん

藤乃 まだ聞こえてる？

かなえ うん

藤乃 ……………ああそう。

かなえ 忘れられるわけないでしょ
藤乃 ……

かなえ 私は、人殺しなんだから

藤乃 ……そう

かなえ ……私、藤乃のためになるなら、何でもするから。自分の人生なんかあってないようなものだから。

藤乃 かなえは、私が死んでって言ったら死ぬの？

かなえ 多分ね

藤乃 五年前から何も変わってない

かなえ ……この本、五年前の話なんだね。

藤乃 読んだんだ

かなえ 私は、希望になんかなれないよ

藤乃 作り話

かなえ え？

藤乃 全部、作り話だから。

かなえ ……作家デビュー、おめでどう。

藤乃 ……

かなえ 私の分まで頑張つてね

藤乃 かなえは？

かなえ ……私は、もう書かない。

藤乃 ……償い？

かなえ 違うよ

藤乃 ……私かなえを呼んだのは、一人きりじゃ自分の生活に必死で書けなくなるから、手伝ってもらうため。償うとか償わないとか、そんなのどうでもいい。だから、書いてもかなえ 私は、藤乃が書けるように、手伝うためにここにいるんだよ

ゆっくり照明変化。

コップを置く山崎、目を覚ます藤乃。

山崎 ……藤乃さん？ あ、寝てました？ 起こしちゃいましたね。ごめんなさい

藤乃 ……山崎さん、何も聞かないの？

山崎 ……まあ。気にはなりますけど、聞いていいことと悪いことがあると思うので。

藤乃 ふふ。ちゃんとしてる

山崎 あ、もちろん、教えてくれるなら聞きたいですけどね！

藤乃 かなえ、怒ってた？

山崎 いや、別に。

藤乃 そう

山崎 ……何で冷たくしたんですか？

藤乃 聞くんだけ

山崎 これは、聞いてもいいことかなって。

藤乃 ……ちよつとね。喧嘩しちゃって。だから山崎さんと、交代したの。
山崎 ごめんなさい、気まづかったですよね。先輩喧嘩したなんて一言も……
藤乃 いいの、気にしないで。またその内、仲直りできるだろうから
山崎 そうですね。あ、でも、もし仲取り持った方がいいなら私、全然手伝いますから！
いつでも言ってくださいね

藤乃 ありがとう

山崎 任せといてください！

藤乃 ……暑いね

山崎 ですね

藤乃 夏って苦手。色んなこと、思い出すから

山崎 色んなこと？

藤乃 ……色んなこと。

山崎 私は夏、好きですけどね。

藤乃 どうして？

山崎 ほら、適当でいいじゃないですか。色んなこと

藤乃 ふうん

山崎 何かあっても、夏だからねって言い訳にできるし。バンドマンだってよく歌ってますし。
だからほら、藤乃さんも、嫌なことは夏だからってことにしちゃえばいいんです！ 夏の懐半端
ないですから！

藤乃 何言ってるの

山崎 ……よし！ 今日こそそうめにしましょう！ 夏ですし！

過去

SE 蝉の声 うるさい

お父さん(山崎)を後ろから花瓶で殴るかなえ。倒れる父。

かなえ ……これでいい。これで良かった

藤乃 かなえ……。

かなえ ごめん。ごめんね。もう大丈夫だから。大丈夫……。

暗転

場面5 部室

一人部室で小説の一節を読み上げるかなえ。ふらりと現れる山崎。

かなえ 「いつ忘れられるかもわからない記憶と一緒に、生きていく。」

山崎 それ、藤乃さんの本ですよ？

かなえ えっ？ ああ、うん。……何でいんの

山崎 部室あつーい。クーラークーラー。うわー涼しい。先輩よくこんなところいれますね
かなえ ……寒がりなの

山崎 熱中症で倒れますよ？

かなえ その時は潔く死ぬかあ……

山崎 縁起悪いこと言わないでくださいよー

かなえ ごめんごめん

山崎 何書いてるんですか？ うわ。漢字いっぱい。どこの小説家ですか？

かなえ 人の書いてるもの覗かないの

山崎 先輩、あのレポートといい、たまには頭良さそうなの書くんですね

かなえ まあ……腐っても文芸部っていうか。

山崎 ふーん

かなえ 何その……藤乃は？

山崎 あー、締め切り近いらしくて。気が散るから、ちょっとどっか行ってって。

かなえ なるほど

山崎 はあーやっぱり部室が一番居心地いいです。楽。

かなえ そりゃいいこった

山崎 ……先輩って、藤乃さんのこと、どう思ってるんです？

かなえ え、何急に。

山崎 いや、別に。

かなえ うーん。どうって言われてもなあ……

山崎 この前、先輩めちゃくちゃ冷たくされてたじゃないですか。何かしたからあんなったんでしょ？ 何したんですか

かなえ ……山崎には関係ないっていうか。

山崎 ……何か、そういうの言われるとショックですね。

かなえ え、ごめん。

山崎 まあいいですけど。藤乃さんに早く謝った方がいいですよ？ 喧嘩ってものは、時間が経てば経つほど、こじれますからね

かなえ 分かってるよ

山崎 ちよつとジュース買ってきます

かなえ うん……

SE 波の音 時々入る

山崎 先輩コーヒーで良かったですか？ あ、牛乳の方が良かったですか？

かなえ それはお腹壊す

山崎 幼稚園児並みのお腹ですねえ

かなえ 嫌味？

山崎 いえ別に？

かなえ ……

山崎 真剣ですね

かなえ うん

山崎 それ、書いてどうするんですか？

かなえ ……どうするんだろうね。

山崎 何ですかそれ。

かなえ 書けば、分かるかも。

山崎 完成したら、見せてくださいよ。楽しみにしていますから。あ、そろそろ戻りますね
かなえ 藤乃のこと、よろしくね

場面6 藤乃の部屋

藤乃、本を手に取り読んでいる。

山崎 その本好きなんですか？

藤乃 ……分からない。

山崎 藤乃さんって、何で小説書いてるんですか？

藤乃 前にも言ったけど、好きで書いてないから

山崎 うーん。それでも書くのって、何でなのかって。

藤乃 書くのに理由なんか必要？

山崎 じゃあきつかけは？

藤乃 きつかけ……。中学生の時に、かなえ、小説書いてて。

山崎 先輩、その時から書いてたんですか？

藤乃 うん。もうだいぶ前だけど。

山崎 へー

藤乃 一度だけ読ませてもらったことがあって。すごく面白かったの。ああ、言葉だけで、こんなに表現できるんだって。初めて知った。あるとき、かなえが読ませてくれなかったら、絶対小説家になんてならなかったと思う

山崎 それが……。きつかけ？

藤乃 もし書く理由を付けるなら、あの時読んだ小説より面白いものを書くために、書いてるってことにする。それなら、好きじゃなくても、悔しいから書いてるってことになるでしょ？

山崎 ……いいですね。

藤乃 満足した？

山崎 はい。

藤乃 ……もう、かなえは書かないのよね

山崎 先輩ですか？

藤乃 私に、書くことを教えてくれたのはかなえなのに、再会したときかなえは、書かなくなってた。何でだろう、何で書かないんだろう

山崎 先輩なら、この前……

藤乃 でもきつと、今のかなえが書いたら、私なんかよりもっといい話を書くんでしょね……

山崎 ……藤乃さん……

藤乃 いっそ書けばいい。書けばいいのよ。かなえが書いてくれなきゃ私は……

山崎 ……

藤乃 私は、劣等感に苛まれずに済む。こんな真綿で首を絞められるような気持ち、味わわなくて済むの。お願いよ……私のために書いて！ お願い！ 私がいるから書かないの？ ねえどう

してなのかなえ？ ねえ？

山崎 藤乃さん！ 落ち着いて

藤乃 ……あなたも、あなたも私よりかなえの方がいいって、私なんかいらなくて、そう思うんでしょ？

山崎 思いませんから。大丈夫です

藤乃 ……そう

山崎 ほら、あったかいもの飲んで一旦落ち着きましょう？

藤乃 ……

山崎、裏へ。

SE 食器の割れる音

SE 海の音

藤乃 あ、……お父さん……やめて、やめて。痛い。嫌だ。やめて。いやあああ

山崎 藤乃さん！？

藤乃 やだ、来ないで、殴らないで！ ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

山崎 藤乃さん！

気を失ったように藤乃昏倒。

場面7 部室

山崎、部室へ移動。

かなえ 山崎。見てよ。完成したんだ

山崎 ……何がですか。

かなえ 小説だよ。出来たら読むって言ったじゃん。だから、はい。

山崎 ……どうも。

かなえ ……何しよぼくれてんの？

山崎 先輩、藤乃さん、過去に何かあったんですか？

かなえ え？

山崎 この前、藤乃さんが急に混乱し始めて、尋常じゃないくらい怯えたあと、気を失って。今も、眠り続けて。もし、何かあったなら、先輩知りませんか？

かなえ ……山崎はその時、何してたの？

山崎 藤乃さんに、紅茶入れようと思って、そしたらたまたま腕が当たって、コップ割れてかなえ ごめん、言い忘れてた。藤乃は、食器とかガラスとかが割れる音だめです。たまにいるでしょ、そういう音が苦手な人。

山崎 ……何ですか？

かなえ 何でだろうね。あ、ほら、藤乃お嬢様育ちっぽいじゃん。だからじゃない？

山崎 はぐらかさないでください。

かなえ は、はぐらかすって。本当の事言ってるだけだよ

山崎 本当に、そうだとして、あんなに怯えるものなんですか？
かなえ ……

山崎 先輩。私に隠してることはありませんよね？
かなえ ……隠すって、何を？

山崎 ……言えないんですか？

かなえ 山崎に言うことなんか何もないよ

山崎 私って、そんなに頼りないですか？

かなえ いや、そういう訳じゃ

山崎 じゃあ教えてください。

かなえ ……知ってどうするの。

山崎 教えてください。

かなえ 山崎がそこまでして聞くことじゃないでしょ。それに、聞いても何もいいこと……

山崎 いいこととかいう問題じゃないです！ 目の前で苦しんでる人がいるのに何もしない方がどうかしてます

かなえ ……

山崎 先輩。

かなえ ……藤乃の、この本、作り話なんかじゃない。本当にあったこと

山崎 それって女の子が、虐待されて足を潰される話ですよ？ どこまで本当なんですか

かなえ 全部

山崎 全部？

かなえ この話にフィクションなんか一つもない。藤乃は本当に暴力を受けていたし、あの話の通り、お父さんに足を潰されたから、ちゃんと歩けなくなった

山崎 ……じゃあ、あのとき、助けに来た希望って誰なんですか？

かなえ ……

山崎 うっそだあ

かなえ 嘘じゃないよ

山崎 ……殺したんですか？

かなえ 全部これに書いてある通り。

山崎 ……えっと……

かなえ ……藤乃は何でこれを書いたんだろう……

山崎 ……

かなえ ごめん。忘れた方がいいよ。覚えてたって、何の役にも立たないから

山崎 ……

過去

かなえ立ち上がり、周囲を回り苦しみ始める。

木 赤い公園

かなえ 仕方なかった。あの時はああするしかなかった。じゃなきゃ藤乃は助けられなかった！

私は悪くない。悪くないんだ。……でも、あの時、あんなことをしなければ、藤乃はお父さんとずっと一緒にいられた？ いつか暴力をやめて、また親子に戻れた？ 分からない。全部私が潰したんだ。あつたかも知れない未来を潰したんだ。……いや。それでも藤乃が生きているなら、生きてさえいければ、もう何だっていい。藤乃が痛くないなら、辛くないなら、それでいい。それが正しい。私は悪くない、悪くないんだ……。

SE 蝉の鳴き声

藤乃 ……かなえ……

かなえ ……藤乃。足、どう？

藤乃 ……一生、ちゃんと歩けないかも、だって。

かなえ ……

藤乃 かなえのせいじゃないからね。違うから。だから気にしないで

かなえ うあああああつあああああ！

藤乃 ……

かなえ あたしが奪ったんだ、全部奪ったんだ……

藤乃 ……

かなえ ごめん、ごめん藤乃、ごめん！ あたし、あたし……

藤乃 ……かなえ。誰もかなえのせいだなんて言っていない。だから、顔を上げて？

かなえ ……ごめん

藤乃 いいから。

かなえ これで、いいわけじゃないよね。ごめん。ちゃんと償う。ごめん……

場面8

藤乃の部屋

藤乃 おかえり

山崎 藤乃さん！ もう大丈夫なんですか？

藤乃 何が？

山崎 ……

藤乃 あの本、気になる？

山崎 私、最初に会った時、この本の事何も知らなくて、好きとか言っていて……

藤乃 それは、素直に嬉しかったけど。

山崎 ……ごめんなさい。

藤乃 何か聞いたの？

山崎 ……はい。

藤乃 ……聞かなくていいこと悪いことがあるって、山崎さん言ってたのに

山崎 ごめんなさい、でも、聞かなくちゃって。あんな藤乃さん見て、何もしないなんて

藤乃 余計なお世話

山崎 それは、そうかも知れませんが。

藤乃 私ね、読者にとって作り話かそうでないかは、関係ないと思うのよ。だって読者は読者な

時点で、他人事になるでしょう？ 自分とは違う世界の話だもの、当然よね。

山崎 ……

藤乃 だからね、全部あなたには関係ないのよ。あなたとは違う世界で起こった話だもの

山崎 たとえ違う世界だったとしても、書いた本人が、起こった事実が目の前にあるなら、他人事だとは思っちゃいけないと思います

藤乃 ……

山崎 私は、先輩のことも、藤乃さんのことも知ってます。だから本当は何があったのかを

藤乃 聞くべきだって？

山崎 ……はい。

藤乃 もう何も変えられない。過去のことよ

山崎 そんなの関係ないです

藤乃 山崎さん、言ってたでしょ。嫌なことは、全部夏のせいにして。何があって、誰が悪いとか、そんなの無いの。全部夏のせい

山崎 ……

藤乃 暑いね

山崎 ……藤乃さんはそれでいいんですか？

藤乃 いいも何も。知ったところで、あなたには何もできないでしょ？

山崎 そんなこと

藤乃 それに。これは私とかなえの問題。あなたが介入していいことじゃない

山崎 ……私は、赤の他人だって言うんですか？

藤乃 事実でしょう？

山崎 五年前のこと、教えてください。

藤乃 ねえ、私の話聞いてた？

山崎 藤乃さん、今も苦しんでますよね？ 私、藤乃さんを助けたいです。だから……

藤乃 だから、何でも知っていい理由になるの？

山崎 ……ごめんなさい。でも、教えてください。知れば、何かできるかも知れないじゃないですか。

藤乃 ……

山崎 もし、もし本当にあの本のこと事実なら、藤乃さんの足は……

藤乃 そうよ。

山崎 ……事故でっていうのは、嘘なんですね？

藤乃 ええ

山崎 なら、助けに来たのは、先輩？

藤乃 そう、かなえ。花瓶で、お父さんを後ろから殴った

山崎 ……

藤乃 ねえ。助けるって、どういふつもりで言ったの？

山崎 え……？

藤乃 今までもこれからも、もうちゃんと歩けない私に、助けなんか、救いなんか無いよ

山崎 ……

藤乃 あなたの言う「助ける」って何？ 私がどうなれば助けられたことになるの？

山崎 ……ごめんなさい。
藤乃 ……もう、いいから。帰って。

山崎、カバンを置いて逃げ出す。
倒れたカバンからかなえの書いた原稿が見える。
手に取り、読む藤乃。

藤乃 何で……

SE インターホン

慌てて原稿を隠す藤乃。

かなえ あ、……久しぶり。

藤乃 かなえ

かなえ ちよつとたまには顔見なきゃって思ってた。山崎は、買い物？

藤乃 ……そう。

かなえ 最近、どうなの？ 執筆活動

藤乃 ……何とか書けてる

かなえ そっか

藤乃 ……かなえ、本当にもう書かないの？

かなえ 小説？ どうだろう。書こうとはあんまり。書きたいことも、特にないし。

藤乃 書けばいいのに

かなえ どうして。ライバルが増えるだけだよ？

藤乃 ……

かなえ まあでも、書くとしたら、もっと先の話かな。今はさ、ほら、藤乃がいるから

SE 着信音

かなえ あ、ごめんちよつと電話。……え？ 今すぐ？ あ、うん。

藤乃 行ってきてあげて。

かなえ ……ごめん。また来る

かなえ、部室へ。

藤乃、隠してた原稿を握り、ぐしゃぐしゃにする。

場面9 部室

山崎 先輩

かなえ 何どうしたの。

山崎 私、よく分からないです。先輩と、藤乃さんの事

かなえ ……私も分かんないよ。

山崎 先輩は、藤乃さんのことどう思ってるんですか？

かなえ ……全部、忘れてほしいって思ってる。……きつと覚えてたっていいことなんかない。覚えてるのは、私だけいい

山崎 ……私、シヨックでした。藤乃さんから、先輩が殺したって聞いたとき。先輩は、絶対そんなことするような人じゃないから、絶対何かあるんだって思ってた。仕方なくやったんですよね？ 藤乃さんを助けるために、仕方なく。

かなえ ……私は、郷田仁の作品が好きだった。でも、離婚してから、仁さんは書けなくなる藤乃に、暴力を振るうようになって。毎日どこかに痣を作ってくる藤乃が見てられなくて。藤乃に暴力を振るう仁さんが憎かった、でも何よりも、尊敬してた人がそんなことをする人だったのが、純粹に嫌だった。藤乃を助けるなんて言葉使って、本当はただ自分が、嫌だっただけ。そう思ったら、急に罪悪感でいっぱいになってさ。私に藤乃を助ける資格なんかなかった、私は、私のために人を殺した。間違いだっただ。

山崎 先輩が助けに行かなかったら、藤乃さんは、きつともっと、辛い目に遭ってたと思います。

だから、先輩がやったことは、正しいことです

かなえ ……私があるとき、あんなことをしなければ、藤乃は父親を失うことはなかったかも知れないのに？

山崎 それは……

かなえ 何が正しかったかなんて、もう誰にも分からない。あるのは、私が殺したって事実だけ。正当防衛。藤乃を守るために、仕方なく。周りからどんなに言われても、そんなきれいごとは、何の意味もない。だって私は、私のために殺したんだから！

山崎 たとえそうだとしても、先輩は、正しいですよ。だって、先輩がどんな思いでやったとしても、藤乃さんを助けたことには変わりないでしょう？ なら、

かなえ 許される？ 馬鹿言わないで。私がやったことは簡単に許されるようなことじゃない！

山崎に、何が分かるの

山崎 ……私……

かなえ 山崎、山崎はあくまでも他人なんだから、人の事は気にしないでいいんだよ。山崎まで背負うことないから。ね。

山崎 ……私、何かできないんですか？

かなえ ……

山崎 藤乃さんにも同じことを言われました。私は赤の他人でしょって。関係ないって。何でそんなこと言うんですか？ 私何もしちゃだめなんですか？ 藤乃さんも先輩も、こんなに辛そうなのに何もできないんですか？

かなえ ……それは、山崎を傷つけないためだよ。

山崎 私の傷なんて、二人に比べればなんてことないです

かなえ お願いだから、これ以上関わらないで。

山崎 ……馬鹿みたい。先輩が関わらせたくせに、これ以上関わるな、って。そんなの自分勝手じゃないですか！

山崎、急いで藤乃の元へ

山崎 藤乃さん！

藤乃 ……山崎さん。

山崎 藤乃さん、歩けます！

藤乃 え？

山崎 絶対、絶対歩けます。私が助けます。私が救います！

藤乃 ……何言ってるの

山崎 藤乃さん、言ってしまったよね？ 今までもこれから、もうちゃんと歩けない私に、助けなんか、救いなんかないって。大丈夫です。私が、歩けるようになります。藤乃さんが歩けるようになれば、先輩だってきつと、喜んでくれますから

藤乃 いや……

山崎 大丈夫ですよ。ほら、立って

藤乃 無理よ

山崎 私がついてます！ ね？

藤乃 やめて

山崎 藤乃さん

藤乃 偽善者

山崎 え……

藤乃 人の事分かった気になって、いきなり歩けだなんて無茶言わないで

山崎 そんなつもり

藤乃 たとえ足がもう治っていて、歩けたとしても、私は嬉しくもなんともない

山崎 ……歩きたくないんですか？

藤乃 あんたには分からない

山崎 ……

駆けつけるかなえ。

かなえ 藤乃

藤乃 ……何で……何で嘘ついたの？ 書いてないなんて嘘じゃない！

かなえ それは違う

藤乃 何も違うない！ 私がいるから堂々と書けないんでしょう？ 邪魔なんですよ？ それ

ならそうって、最初から言っつてよ

かなえ そんなことない

藤乃 あの時私も殺せばよかったのよ！ あの時なら、きつとお父さんが殺したってことになつて、かなえには何も

かなえ だから違うって！

藤乃 ……

かなえ ごめん、ごめん

藤乃 ……帰って……

かなえ ……分かった。

山崎 先輩、私、……すみません

かなえ ……原稿、藤乃のところ置きっぱなしにしたでしょ

山崎 ……ごめんなさい

かなえ いいよ。

山崎 私が、馬鹿でした

かなえ ……

山崎 最初から先輩は知ってたっていいことないって言ってくれてたのに、知ろうとして、知ったら知ったで、藤乃さんも、先輩も傷付けて……やっぱり、私には何もできなかったかなえ ……ありがとう。

山崎 何で先輩がありがとうなんて言うんですか

かなえ 山崎はいい後輩だよ

山崎 ……

かなえ もしも、つて、考えたらきりがないけど、考えた数だけ、救いがあるって思えば、想像でも、救われた気になれるんだって、書いて、分かったんだ。私はきつと、頭の中の救いを形にして、救われた気になりたかったのかもって。

山崎 ……

かなえ 私ずつと分からなかった。どうして藤乃は、あんな辛い出来事を小説にしたのかって

山崎 それは……

かなえ 藤乃は、小説にして忘れたかったのか、救われたかったのか、

藤乃 あの小説でかなえは、希望になってくれた

かなえ 希望

藤乃 私は、過去にしたかったんだと思うの。ほら、人って、過去をどんどん美化してしまえるでしょ？ 過去にしてしまえば、嫌な思い出もだんだん薄れて、ただ、事実だけが残って。冷めた気持ちで、もうどうでもよくなれるかなって。

かなえ ……そうなれた？

藤乃 分からない。でも、今でもあの日のことは、夢に見る。お父さんが金づちで私の足首を潰す夢。苦しくて目が覚める。だけど仕方ないかって、今は思える。トラウマなんだから、夢にくらい見るのは当たり前でしょう？

かなえ ……

藤乃 逃げたいとは何度だって思う。でもね、過去はどうやっても変えられないし、事実は事実だから、私は受け止めるしかないのよ。逃げ道なんかどこにもない。いつか、記憶が薄れるのを待つしかない。……かなえ、あなたは受け止められた？

かなえ ……私は……希望にはなれない

藤乃 助けてくれたのは、まぎれもない、あなたでしょう？

かなえ ……

山崎 ……藤乃さんは、自分じゃなくて、先輩を救いたかったんだと思いますよ

暗転

場面11 藤乃とかなえ 夢

㊦ ノクターン一番

藤乃 海の声がね、聞こえるの。ずっと。

かなえ ……

藤乃 今にも海に飛び込んで、死んでしまいたいような顔かなえ そうしてって言うならそうするよ

藤乃 ……もうすぐ時間でしょ？ ほら。行って

かなえ 私も、海、聞こえてる。

藤乃 ……

お父さん(かなえ)を後ろから花瓶で殴る山崎。倒れる父。

山崎 ……これでいい。これで良かったんです

藤乃 かなえ

山崎 ごめんなさい。もう、大丈夫ですから。

藤乃 ……

山崎 だって、先輩のしたことは正しいことです。ほかに、どうしようもないんですから。

藤乃 そのとき、彼女はこう思った。ああ、私はここで死ぬのか、と。月並みな感想だと笑った。ゆらりと大きな影が動いた。鈍器を右手に握って、そいつはかつての母の名前を叫んだ。どこにも逃がさない。そして、思い切り振り下ろした。その瞬間、鈍く、骨が碎ける音がして、彼女の足は動かなくなった。みるみるうちに青紫色に変わっていく足首を、ただ力なく眺めて、目の前の影が早く去ることを願った。しばらくして、足音が聞こえた。何かか勢いよく割れた音がしてすぐに、影は彼女に覆いかぶさるようにして倒れた。生暖かい血が、首から、そして床へと流れ出ているのが分かった。荒れた呼吸が聞こえる。視線の端に割れた花瓶の破片が見えた。顔を上げると、そこには見知った顔があった。

希望がそこにはあった。動かない右足、倒れた父親。遠くでは幾重も波の行き交う音が聞こえる。父を殺した彼女を、ただ、許そうと思った。

きつとこれから先、彼女達は、いつ忘れられるかもわからない記憶と一緒に、生きていく。

暗転

山崎 遠藤せんぼーい

かなえ ……

山崎 おはようございまーす！ いや、おそようございます？ あ、おはようございます！

かなえ 今何時？

山崎 もう四時過ぎですよ。

かなえ うわ……寝すぎた。単位……

山崎 落としちゃいましたか。何してるんですかー。流石に間に……合わないか。ご愁傷様ですかねえ ……おやすみ。

山崎 あっ、もう先輩寝ちゃうんですかあ？ お得意の現実逃避ですか？ ねー先輩、単位落とした現実は寝ても変わりませんよ？

かなえ 敵しいことばつか言うなあ

山崎 先輩のためを思ってます

かなえ 私は私の人生があるんだから好きにさせてよ

山崎 先輩の人生？ そんなのあるんですか？

かなえ え……

山崎 藤乃さんのお父さんを殺した先輩に、自分の人生なんかあるわけないでしょ？ 人の人生を奪った挙句、狂わせたのは先輩なんですから

かなえ ……

山崎 自分のために人を殺すような先輩に、生きてる意味あるんですか？ 死んで償った方がいいんじゃないですか？ それ以外に償う方法なんかないでしょう？ ほら、あの海の方こうに行けば、死ねますから。きつと藤乃さんも先輩が死ねば大喜びですよ
かなえ そう……そうだね。

藤乃 かなえは、私に死んでって言ってほしいんでしょう？ あの日、本当は海に飛び込めって、死ねって、言っただけじゃなかったんでしょう？

かなえ それが償いになるんだよ。

藤乃 あなたの言う償いって、自分が救われるための償いでしょ

かなえ ……

藤乃 私を自分が救われるために利用しないで……

かなえ 海が、花瓶の割れる音が、藤乃の叫び声が、何もかも忘れられなかった。藤乃の全部を奪ったんだって、だから償わなくちゃって

藤乃 償うって、私と向き合っただけかなえは、何をしてくれるの？

かなえ ……

藤乃 お金をくれるの？ 一生私の世話をしてくれる？ ねえ、それで、本当にいいの？ 私が、それを本当に望んでると思ってる？

かなえ ……

藤乃 人を殺したとしても、あの時は仕方がなかった。かなえはああするしかなかった。だからもういいでしょ。かなえには、かなえの人生があるの。私が望んでるのは、償われることよりも、

かなえが前を向いて生きることよ

かなえ ……………

藤乃 言ったでしょ？ 作り話って

かなえ ……私が、仁さんを殺したのは、藤乃を助けるためじゃなくて……

藤乃 自分の事しか考えてなかったから

かなえ ……

藤乃 だから？ あなたがどう思っているよと、私はあなたのおかげで助かったんだもの。感謝こそすれども、あなたに望むことなんか何もないわ

かなえ でも、私には、無かったことにはできないから

藤乃 なら、ちゃんと受け止めて、背負って、生きていけばいいじゃない

かなえ ……

藤乃 これ、面白かった

かなえ ……

藤乃 かなえはきつと書いた方がいい

かなえ そうかな……

藤乃 お願い。私のために書いて

かなえ ……分かった。

藤乃 会ったら、山崎さんに謝っておいて。

暗転

場面13 部室

かなえ お疲れ

山崎 あ、先輩！ 先輩凄いですねー、大学やめたかと思えばあつという間に有名作家の仲間入り！ ほらっ、先輩の本、三冊も買っちゃいましたよ

かなえ ありがとう

山崎 売上貢献は後輩の務めですからね！

かなえ 無理せずにね

山崎 藤乃さんに、書いてって言われたんですよ？

かなえ うん

山崎 なら、満足に書いてもらうために、もっと文芸部全員で、売上貢献しなきゃですね！

かなえ 山崎、ありがとうね

山崎 え

かなえ これからは、ちゃんと受け止めて、背負って、生きていくから。

山崎 ……はい。あの、先輩。また、藤乃さんに会いに行ってもいいですか？

かなえ ……うん。

ゆっくり暗転。

藤乃にスポット

藤乃 海の音がね、聞こえるの。ずっと。

かなえ ……

藤乃 ……もうすぐ時間でしょ？ ほら。行って

かなえ 私も、海、聞こえてる。

藤乃 ……

かなえ 聞こえてる内に、必ず会いに来るから。

藤乃 待ってる。

藤乃 私達は、いつ忘れられるかもわからない記憶と一緒に、これからも生きていく。

暗転。

M FLASHBACK やくしまるえつこ

了